

諫早市小野島の *Suaeda* (マツナ属) 植物はシチメンソウだった

中 西 弘 樹

Hiroki NAKANISHI: On the *Suaeda japonica* community in Onojima, Isahaya City.

ABSTRACT: *Suaeda* species growing in Onojima had been misunderstood as *S. maritima*. It is properly identified with *S. japonica*. The difference between *S. maritima* and *S. japonica* was shown in this paper.

はじめに

諫早市小野島海岸の *Suaeda* (マツナ属) 植物は、これまでハママツナとされてきた (外山 1957; 1980, 中西 1989, 江島 1990 など)。そしてその群落の規模は日本最大で、晩秋には一面に赤く紅葉するため、しばしばマスコミにも取り上げられ、そこを訪れる人も多く、諫早湾のハママツナ群落として有名になっていた。しかし、福岡県の 2, 3 の研究家からシチメンソウではないのかという疑問がなげかけられていた。そこで佐賀県のシチメンソウや他地域のハママツナと比較してみたところ、これまでの分類にしたがえば小野島のものはハママツナではなく、シチメンソウであるという結論を得たので、ここに誤解していた経過と両種の簡単な区別点について報告しておきたい。ハママツナは変異が大きいので、ここで使った資料は諫早湾内の湯江の海岸で採集したものを用いた。

尚、シチメンソウとハママツナの詳細な区別点および変異などについては、別に発表する予定である。

本報告をまとめるにあたっては、長崎大学陣野信孝助教授、諫早農業高校の田中清氏、元長崎大学学生篠原裕志氏にお世話になった。厚くお礼を申し上げる。また本論文を元長崎北陽台

高校の故江島正郎氏にささげたい。

誤解の原因と経過

長崎県の植物研究家が、小野島のシチメンソウをハママツナとみなしてきた理由はいくつかあった。長崎県のフロラをまとめた『長崎県植物誌』(外山 1957; 1980)にはハママツナしか記載されていなかったのもその原因の 1 つであつたろう。当時、長崎大学外山三郎教授は諫早湾で採集したマツナ属植物を、シチメンソウを研究していた北九州大学の畑中健一氏に送り、ハママツナとの同定を受けている。また畑中 (1956) は外山の私信を引用し、有明海にはシチメンソウはないと記述したこともあった。このようなことから、長崎県の研究家は小野島のものをハママツナと信じるようになっていった。

また筆者自身、佐賀県の研究家によって有明海の湾奥の産地を案内してもらい、東大の原寛博士の同定したと言われるシチメンソウとハママツナの群落をそれぞれ観察したが、区別がつかず (どちらの群落もシチメンソウであつたと思われる)、シチメンソウとハママツナは同一物であると考えていたこともあった。

一方、Makino (1909) によって発表されたシチメンソウの原記載をはじめ、市販の図鑑類や『日本植物誌』などの文献の中でも、シチメン

ソウとハママツナについて、必ずしも明確な区別のつく記載がなされていなかった。それらの文献は葉について、シチメンソウが円頭または鈍頭で、こん棒状、ハママツナは鋭頭で、ひ針形または狭線形をあげている。後で述べるように確かに両種で葉の形態は異なるが、葉の先端に関して言えば、この記載はわかりにくく、シチメンソウも先端はわずかに尖る。ただ満潮時に完全に冠水してしまい、葉がごみなどによって絶えず擦れるために先端が円頭になっているものがあるだけである。また種子に関して、両種とも硬実種子と軟実種子をつくるにもかかわらず、シチメンソウは多くが軟実種子ができるので、それについてのみ記載し、ハママツナについては硬実種子だけを記載してきた。

以上のような誤解のもとになる経過があったが、同定のミスを他にもとめるつもりはない。最大の理由は筆者自身を含めて、長崎県の植物研究家が不勉強であったためである。

シチメンソウとハママツナの区別

葉のつき方

茎の先端から2 cmまでの葉の数を数えてみると、シチメンソウは4—5枚であるのに対して、ハママツナは10—13枚であり、ハママツナの方が倍以上密につく。また茎に対する葉のつく角度については、すでに北村・村田（1961）がの

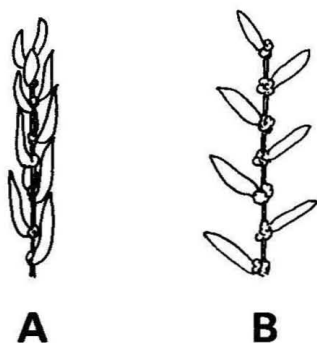


図1 葉のつき方

(A：ハママツナ，B：シチメンソウ)

べているように、シチメンソウは茎に対して広い角度でつくが、ハママツナは上向きにつく（図1）。角度で示すとシチメンソウが茎に体して60—70°でつくが、ハママツナは10—20°と狭い。

葉の長さ、幅、厚さ

二次葉（茎の上部についた短い葉）の長さの先端部から基部への変化について、シチメンソウは7—12mmと、大きな変化はないが、ハママツナは4—15mmと小さな葉から、しだいに大きな葉へとうつり変わる。また葉の幅と厚さについてシチメンソウは幅2.1—2.6mm、厚さ2.1—2.4mmと、断面は円に近いが、ハママツナは幅2.1—2.8mm、厚さ0.8—1.4mmとやや扁平である（図2）。

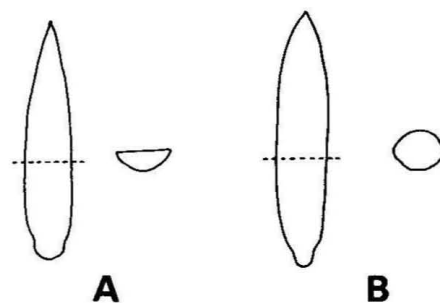


図2 葉の形と断面

(A：ハママツナ，B：シチメンソウ)

種子の形

マツナ属植物は一般に、種皮がきわめて薄く、すぐ発芽するやや大形の軟実種子と、種皮が硬く、発芽に時間がかかる黒色で小形の硬実種子の2種類をつけることが知られている。この両種も例外ではないが、シチメンソウは多くが軟実種子であり、その逆にハママツナは硬実種子を多くつける。そのため大井（1975）をはじめ大部分の文献には、シチメンソウの軟実種子とハママツナの硬実種子とを、あるいはそれらを包む果がく（果実）の大きさを比較し、両種の違いとしている。それらはもともと異なる性質の種子であるため、種の違いの特徴としてあげるの正しいとは言えない。種子の特徴を比較

するなら、軟実種子どうし、あるいは硬実種子どうしを比較すべきである。これらの比較はすでに竹内・玉井（1937）が行っているが、ほとんど引用されることはなかった。これによると軟実種子、硬実種子いずれもシチメンソウの方が大きいと言う。しかし、畑中（1956）は硬実種子を比較し、竹内・玉井（1937）の結果とは逆にハママツナの方が大きいとしている。筆者の資料では軟実種子はシチメンソウが大きい、硬実種子の違いは有意な差はなかった。

軟実種子と硬実種子の割合

前述したように自然状態ではシチメンソウはほとんど軟実種子ばかりつけ、ハママツナは硬実種子を多くつける。軟硬の割合は竹内・玉井（1937）によればシチメンソウがおおよそ90：4、ハママツナが57：43である。筆者の観察では、それらの割合は生育地の環境によってかなり変異するようで、一般に塩分濃度が低くなるにつれて硬実種子の割合が多くなるようである（中西；未発表）。

生育形

シチメンソウは中下部より多くの枝を出しているものの、主茎はほぼ直立している。それに対して、ハママツナは生育立地によって変異するものの、シチメンソウの生育地に近い塩分濃度の内湾では、下部より分かれた枝が横に広がり、また半ばほふくし、主茎ははっきりしない。

シチメンソウの保護

シチメンソウはハママツナに比べて分布域が狭く、産地が少ない。古くから知られていた大分県や福岡県の産地は絶滅寸前の状態にあり、自然保護協会のレッド・データブック（1989）でも絶滅の危険がある種として扱われている。小野島海岸はシチメンソウ群落として、日本最大の規模である。しかし、諫早湾の干拓事業はすでに着工が始まり、遅かれこの群落は消滅することになっている。早くからこの群落がシチ

メンソウだと確認され、その貴重なことが十分理解されれば、国あるいは県の天然記念物に指定されたであろう。もしそうならいけば、この事業を中止にさせることができたかも知れない。そう考えると、残念な気がしてならない。何とか保護されるように望む次第である。

文 献

- 江島正郎・田中 清・林田真治・原 正隆・横尾昌之・伊藤謙太郎（1990）：長崎県諫早市小野島のハママツナ。日本の生物 4：69—76。
畑中健一（1956）：シチメンソウの分布と生態・採集と飼育18：112—117。
北村四郎・村田 源（1961）：原色日本植物図鑑 草本編(中)。390pp. 保育社、東京。
Makino. T. (1909): Observations on the Flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo 23 (265): 11-23.
中西弘樹(1989)：有明海沿岸の塩生植物。採集と飼育51：484—487。
大井次三郎（1975）：改訂新版日本植物誌顕花篇。1256pp. 至文堂、東京。
竹内 亮・玉井虎太郎（1937）：二三のアカザ科植物の異型種子の形態及び生態に関する観察及び小実験。植物及動物 5：47—57。
外山三郎（1957）：長崎県植物誌。104pp. 長崎県理科教育協会、長崎。
外山三郎（1980）：長崎県植物誌。321pp. 長崎県生物学会、長崎。
(なかにし・ひろき；〒850 長崎市弥生町666 長崎女子短期大学)